

H17.12.1

企画書

北九州芸術劇場×飛ぶ劇場 共同製作

アイアン IRON



作・演出 泊篤志

2006年

2月11日(土)・12日(日)

熊本県立劇場演劇ホール特設ステージ

3月 3日(金)～ 5日(日)

東京芸術劇場 ホール1

2005年

10月7日(金)～10日(月・祝)

北九州芸術劇場 小劇場

10月15日(土)・16日(日)

AI・HALL

10月28日(金)・29日(土)

まつもと市民芸術館

11月5日(土)・6日(日)

西鉄ホール

お問合せ・資料請求

北九州芸術劇場 制作：黒崎あかね、澤藤歩、田上佐和子、国好みづき 広報：栗原弓枝

〒803-0812 北九州市小倉北区室町1-1-1-11

TEL093-562-2530 / FAX093-562-2633

北九州芸術劇場 × 飛ぶ劇場共同製作

北九州芸術劇場では劇場オープンの初年度から九州でオーディションを行い、地元の演劇人を中心に構成する創造事業に力を入れてまいりました。

平成15年度「大砲の家」(作/泊篤志・演出/内藤裕敬)

平成16年度「冒険王04」(作/泊篤志・演出/岩崎正裕)

そして今年度は泊篤志氏との3度目の作品づくりとして、泊氏が率いる劇団と共同製作を行うことで北九州の演劇を全国へ発信していきたいと思ひます。飛ぶ劇場は近年東京公演を重る劇団となりましたが、今回共同製作をするに当り、今以上に作品の可能性を広げてもらいたいと願っています。そして、より多くの地域の人にご覧頂ける機会も作りました。劇団の作品づくりの情熱に劇場が加わり、よりパワーアップした作品創りを目指したいと思ひています。

劇場がオープンして2年、北九州市だけでなく九州の劇団とのコラボレーション、そして全国へ発信の先駆けにしたいと思ひます。

公演にあたって

だいたい、戯曲を書いている時は、ある種の「予感」を持って書いているものの、「確信」を持って書いてはいないものだ。

書き上げた1999年より2年ほど前、この『IRON』を構想した時もそうだった。東京のサラリーマン生活に見切りをつけ地元北九州に帰ってきて演劇活動を再開したものの、これで良かったのか?と自問する日々。世間は何となく世紀末な雰囲気に加え、自分自身が抱いていた閉塞感とそこからの脱出願望もあった。同時にそこから抜け出すことが本当の幸せなのか?という問い。そういったものを無意識に物語にしていって…んだと思う。何せもう6年前なのだ。細かい動機や手順はもう覚えていない。今の自分が迎えるのは、そこに書かれた文字だけなのだ。

2002年、北九州演劇祭10周年記念公演として『IRON』がク・ナウカの宮城總氏の演出で再演された。その時に初めて自分の書いた『IRON』を客観的に見る事が出来た。ああ、こういう物語だったのか。この作家はこういう事を叫びたかったのか。上演されている日々は、発見の日々だった。

そして、今回。再演を決めたのには2つの理由がある。1つは気持ち的な動機。おそらく今、あの頃の気分に近いのだ。アンテナが『IRON』にあってきたのかも知れない。北朝鮮から帰国した拉致被害者の方々の興味深い発言に触発されたのかも知れない。もう1つは、演劇的な動機だ。今思うと初演の『IRON』はあまりに幼かった。今の劇団の持っている全力で『IRON』を成就させたい。そう思ったのだ。幸い、北九州芸術劇場が共同製作についてくれて、最強のスタッフも揃った。

再び、僕らは脱走劇に胸を熱くする。

「本当の幸せとは何か？」

僕らは全力で問いかけてみたい。

熱くなる事がカッコ悪い今の時代に、あえて僕らは熱く走り抜けてみたい。

(泊篤志)

ものがたり

太平洋戦争後、日本から独立した国家「糧流島(かてるじま)」。国民のほとんどが主な産業である鉄鋼労働に従事しているが、60年間に渡る実質的な鎖国政策によって経済は行き詰まり、国民は貧困と飢餓に苛まれていた。

そんな生活のなか国技である卓球の選手は国から特待労働者として優遇されていた。しかし彼らの関心は国内にはなく、世界選手権やオリンピック参加を夢見ていた。

ある日、伊佐史(いさし)という卓球部員が島を脱出し射殺される。名誉挽回に走り回るコーチ。しかしチームメイトの板民(いたたみ)はその現実にも関わらず、日本に対して憧れを抱いていた。芸能部に所属する恋人広根(ひろね)の静止も聞かず、糧流の伝統芸能、華玉木(はなだまき)に紛れての脱出を目論む。卓球部員も国の重要な行事に併せて華玉木を踊ることになっているのである。そんな中、天才卓球少女の末(すえ)が入部。日本からは雑誌記者古池(こいけ)が来島する。末は日本の放送が入るラジオを所持しており、それを卓球部員に聞かせる。その放送を録音したテープを板民に渡す末。

板民は、自分がいなくなったら広根に渡してほしいとチームメイトの多久(たく)にテープを託す。ところがテープを不法所持していたとして多久が公安に捕まってしまう。実は末は公安側のスパイだったのだ。不正を働いた親を人質に獲られ、公安の手伝いをするしかなかったのだという末に返す言葉もなく、衝撃を受ける卓球部員たち。その事件を通じ、自分の国が置かれた現実を改めて思い知った板民は、古池からの情報を得て、島からの脱出を決意する。広根のもとにテープだけが戻ってくる。そこには島を脱出する板民の思いが録音されている。「このまま糧流にいて、生きてまま死んでいることより、自由を目指し日本へと行く」と。板民の行末に待っているのは死か自由か、それともそのどちらでもない何かか。テープからは板民の声に続き、日本の流行歌「いつでも夢を」が流れてくる。重苦しさに包まれるなか、暗転。

キャスト

寺田剛史
永井秀樹（青年団）
木村健二
橋本茜
藤尾加代子
鵜飼秋子
門司智美
加賀田浩二
内田ゆみ
佐成哲夫（sanaridance）
藤原達郎
葉山太司
内山ナオミ
北村功治
宗像秀幸
桑島寿彦

スタッフ

[作・演出]	泊篤志
[美術]	柴田隆弘
[衣装]	内山ナオミ（工房 MOMO）
[照明]	乳原一美
[音響]	杉山聡
[振付]	佐成哲夫（sanaridance）
[音楽]	泊達夫
[小道具]	山口千琴
[特殊小道具]	橋本茜（Art Stage-KenTa）
[舞台監督助手]	森田正憲（F・G・S.）
[照明操作]	岩田守
[音響操作]	塚本浩平
[舞台監督]	東孝史
[宣伝美術]	トミタユキコ（ec ADHOC）
[広報宣伝]	佐藤和久・栗原弓枝
[制作]	黒崎あかね・澤藤歩・田上佐和子・国好みづき 鶴元ふみ（飛ぶ劇場）／津村卓

公演概要

東京芸術劇場 小ホール1 リージョナルシアター・シリーズ

2006年3月3日(金)～5日(日)

3月	3	4	5
	金	土	日
14:00		F	F
18:00		H	
19:00	H		

- * 開場は30分前
- * 未就学児はご入場頂けません。
- * 3月4日18:00公演終了後ポスト・パフォーマンス・トークを予定しています。
- * 古池記者役 ダブルキャスト
3/3(金)19:00・4(土)18:00・・・葉山太司(H)
3/4(土)14:00・5(日)14:00・・・藤原達郎(F)

料金(全席自由・日時指定・税込)

一般 2,500円 当日 2,800円

高校生以下 1,500円 当日 1,800円(北九州芸術劇場・劇団のみ取扱)

前売開始 1月11日(水)

チケット取扱 チケットぴあ 0570-02-9999 / 0570-02-9966(Pコード:366-216) <http://t.pia.co.jp>
e+(イープラス) <http://eee.eplus.co.jp> (パソコン&携帯)
東京国際芸術祭(TIF) 03-5961-5202 <http://tif.anj.or.jp>

お問い合わせ 北九州芸術劇場 芸術文化情報センター

TEL: 093-562-2655

<http://www.kitakyushu-performingartscenter.or.jp/>

〒803-0812 北九州市小倉北区室町1-1-11 リバーウォーク北九州6階

リージョナルシアター・シリーズ4 演目セット券あります

前売発売開始 2006年1月11日(水)

4演目セット券 6,000円 *TIFで前売のみ取扱

東京国際芸術祭(TIF) TEL: 03-5961-5202 <http://tif.anj.or.jp>

プロフィール

飛ぶ劇場

1987年結成。北九州市を本拠地に、東京など全国へ出向いている。'92年には『イムズ芝居』最優秀劇団に選出され、イムズホールを踏む。'93年、現代表の泊が東京からUターンし、作・演出として劇団の方向性を舵取りする。'97年、泊篤志が作品『生態系カズクン』で第3回日本劇作家協会新人戯曲賞を受賞。2000年、作品『IRON』が第44回岸田國土戯曲賞の最終候補作となる。（『IRON』より、ツアー演目については動員1000人を越え続けている。）
日常の機微をあっけらかんと描く脚本と、方言などによる血の通った言葉へのこだわり、歌や舞踊での「祝祭」としての高揚を重視した演出を展開している。

構成

現在24～40歳の、男性13人・女性7人。
作品事に客演やオーディション合格者等を交えてキャストを構成する。

作・演出：泊 篤志(とまり あつし)



飛ぶ劇場・代表。劇作家・演出家。1968年生。北九州市門司区出身。北九州大学に在学中、演劇研究会で上演作品の執筆・演出を担当。後、東京で約2年TVゲームのシナリオ等の仕事をし、北九州へUターン。1993年「飛ぶ劇場」に復帰し、以来、脚本・演出を担当。新しい要素を取り入れつつも娯楽性を忘れない姿勢で作品創作に取り組む。1995年に劇団代表を引き継いで現在に至る。1997年『生態系カズクン』で「第3回日本劇作家協会新人戯曲賞」受賞。1999年『IRON（アイアン）』が第44回岸田國土戯曲賞最終選考（6作品）にノミネートされ、2002年には北九州演劇祭10周年記念作品として上演された。同年、長崎市の市民参加舞台『生態系カズクン』の演出を長崎市に滞在して制作し、長崎ブリックホールにて上演。また、演劇ワークショップや戯曲講座、大学の特別講師、雑誌のコラム執筆など活動の幅を広げている。

出演・振付：佐成 哲夫(さなり てつお)



1992年多摩美術大学入学。以後演劇を中心にダンス、映像などを学ぶ。卒業後、美術、音楽、衣装、装置など様々なジャンルの人達との共同作業を軸に創作活動を展開する。

1998年T2O(現 sanaridance)を結成。

1998、2000年バニョレ国際振付賞ジャパン(横浜)プラットフォームに選出される。SPAC 振付コンクール 2001にて最優秀賞受賞。

2003年より多摩美術大学特別講師。

現在は自作品の創作をはじめ、演劇作品、映像作品の振付、ダンサーとして他作品への出演、また野外、ギャラリー、廃校でのパフォーマンスなど活動している。

出演：永井 秀樹(ながい ひでき)



1966年大阪生まれ。劇団「青年団」所属。

86年大学在学中に自ら劇団を旗揚げ。6年間活動の後退団。

92年青年団入団。95年より「東京タンバリン」を制作・運営。

97年からは一人芝居シリーズ「Nの館」など「N」シリーズも不定期に開催 小劇場中心に舞台での活動を行う。

外部出演も多く、ラッパ屋、KERAMAP、弘前劇場などにも出演。

2002年9月には松村武との2人芝居「動物園物語」を自らプロデュース、東京・大阪で上演した。

海外公演も数多く経験

青年団「東京ノート」で韓国(99年)、北米(00年)へ、弘前劇場「家には高い木があった」でドイツ(05年)

また制作として「東京タンバリン」(東京都杉並区)の運営も手がける
個人HPアドレス <http://n-yakata.sunnyday.jp/>

主な舞台：

青年団公演

「北限の猿」(92年・96年) 「東京ノート」(94年～2000年)

「冒険王」(96年) 「暗愚小傳」(03～04年)ほか

高山植物園(青年団リンク)

「紛れて誰を言え」(02年・04年) 「月輝きて太陽の照る」(03年)

「灰の中から蘇った男と女」(05年)

ラッパ屋

「裸天国」(96年) 「エアポート97」(97年)

個人プロデュース

「ひではじめ」(ラッパ屋おかやまはじめとの二人芝居 98年)

「動物園物語」(カムカムミニキーナ松村武との二人芝居 02年)

KERA・MAP # 001

「暗い冒険」南プロ(01年)

弘前劇場

「家には高い木があった」(04～05年)